

A study on the relationship between human existence and the acceptance of a work of art: Thorough the investigation of a personal acceptance of the Bunraku play, The Love Suicides at Sonezaki

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/32080

氏名	笠井津加佐
生年月日	
本籍	
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	社博甲第 113 号
学位授与の日付	平成 22 年 9 月 27 日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第 4 条第 1 項）
学位授与の題目	人間存在と作品受容の関係について — 文楽『曾根崎心中』の個別受容からの接近— A study on the relationship between human existence and the acceptance of a work of art — Through the investigation of a personal acceptance of the Bunraku play, <i>The Love Suicides at Sonezaki</i>
論文審査委員	委員長 柴田正良 委員 柘植洋一, 西村 聡 溝部明男, 森 雅秀 南 さと子（武蔵野音楽大学）

学位論文要旨

本論文の課題としたことは、人間存在と作品受容の関係について、個別受容者（筆者）と個別対象（文楽『曾根崎心中』）を取り上げて、考察することであった。

考察の目的は、大きな意味では、学部・修士課程時代からの文学研究を通して抱いてきた、文学とは何かという疑問から発した問題、人間にとって文学や芸術といったものは何であるのかについて、考察することであった。考察の方法としては、作品受容の受容者相対的な部分に着目し、個別・個人的な水準で両者の関係を考察することから、人間にとって作品がどのような働きを持つのか、人生とどのような関係を持っているのかについて、明らかにする方法をとった。文学や芸術作品に対して人間の中に生じる情動は様々で複雑であるが、議論が拡散しないよう、今回は、作品と受容者の端的な関係をしめす「感動」を焦点に考察を行った。

研究過程において筆者が留意したことは、考察対象が大いに主観的な面を持っているので、議論に具体的な側面を、可能ならいわゆる客観的な側面を付与することであった。そのため、以下の 3 点を中心に作業を進めた。

1. 議論に客観性を付与するための前提として、対象作品の全体像を想起できるような資料（文楽スコア）の作成を試みた。その資料を構造分析することで、受容者が感動する部分の絞り込みを行った。その際、言葉・音・動きといった文楽を構成する主な要素を、出来るだけ均等に扱うように心がけ、対象作品：文楽の特質を分析・考察することに叶うような配慮を行った。
2. 文楽スコアによる考察から得られた「感動する部分」を音声資料から抽出した上、フーリエ解析など物理的な解析を行い、特に感動と関係があると思われる部分を、具体的な形や数値で提示した。
3. 人間と作品の関係について、受容者を立脚点とした心理学的実験を行うことから、その関

係について考察した。

論文は6章からなる。

第1章第1節では、文楽『曾根崎心中』が本研究の作品事例となりうる理由を述べた。

文楽『曾根崎心中』の上演については、以下のことが明らかになった。原作の初演時（元禄16年）には作品への高い評価が認められたにもかかわらず、その再演は、公儀の相对死禁止令の影響があるとはいえ、享保2年など僅かな事例にすぎない。その後、改作ものの上演はあったが、昭和30年に復活上演される前は、70年ほど全く上演のない期間もあった。さらに、復活上演されたおりの評価はさまざまで、不評も見られた。しかしその後、現在まで上演回数は千回を超え、海外でも愛される作品の一つとなっている。こうしたこの作品の多様な受容は、受容者相対的な問題を考察するには適しており、考察の価値ある作品であると考えられた。

第2節から第4節では、分析可能な資料を作成した。対象とする文楽『曾根崎心中』は、言葉と音と動きによる総合的な表現として存在している。文楽を包括する浄瑠璃研究は、まず、原作に関する文学研究が進んでいた。近松の原作が文学的に優れていたことは言うまでもなく、文学研究の対象となる正本が残っていたことが、研究の基礎となる解読・比較検討などの分析を可能としたためであった。それに対して音や動きは、連続した記録を残しにくく、研究としては遅れていた。

管見によれば、音楽面に関しては、1986年、横道万里雄・井野辺潔両氏による文楽の音楽様式に関する基礎的で体系的な報告書が纏められている。その後も、山田智恵子氏らによって音楽的研究が深められている。

しかしながら、動きに関しては、人形そのものの研究などは存するが、文楽人形の舞台上での動きを分析した研究は確認できていない。

筆者が考えていたのは、文楽全体を対象とする分析・考察の試みであったので、研究が遅れていた文楽の人形の動きに関しては、記述法から検討する必要がある。筆者は、日本で紹介されている記述法の中で、動きの実態を想起させうる可能性が大きいと思われた **Benesh Movement Notation** による記述を採択し、共同研究者である新国立劇場附属バレエ研修所講師・新谷佳冬を通して、英国の **Benesh** 協会へ記述を委嘱した。委嘱に際し、費用は平成18年度金沢大学大学院学生当配当金、平成19年度・20年度プロジェクト研究費によった。記述された舞踊譜の著作権は、共同研究者であり舞踊譜記述者の **Elizabeth Sullivan** が有する。また、納入された譜面自体は、金沢大学が保管している。音の五線譜化は、委嘱時、東京芸術大学大学院生であった、南摩衣子氏、原納愛氏他の協力による。

文楽スコア作成は、企画・立案者は筆者であるが、上記の人々の共同作業により行われた。

第2章では、文楽スコアを使用して、文楽作品を受容者はどのように受容しているのか、その構造を分析した。第1節・第2節で分析の手順を述べている。まず分析の観点を、文楽作品の重要な構成要素である言葉・音・動きの3点に限定した。その上で第3節では、これらの点が文楽ではどのような関係で結びついているのか、また、それらを受容者は、視覚や聴覚といった感覚でどのように受容しているのかを、文楽スコアから分析・考察した。

第3章では、文楽スコアから抽出した受容者の感動と関わる部分について、物理的な解析を行って、波形表示を行い、受容者の感動と関わりが大きいと思われるところは、フーリエ解析によって基本周波数とパワーの関係を例示した。ここでは、文楽の音の状況（受容者が聴覚によって受容している対象の様子）について、目で見える形で、人間の解釈を交えない物理的な解析結果を表示することが主な目的だった。

第4章では、人間の情動と作品との関係を、心理学的実験から考察した。

第1節では、実験に至る経緯を述べた。第2節では、視聴覚による作品受容に関する心理

学的見解を概観し、第3節では、本実験が参考とした心理学実験について述べた。

第4節では、まず実験の目的・方法・実験参加者・刺激・実験装置・実験手続きを述べ、続いて実験結果をふまえて、作品に対する熟達度、刺激の種類、刺激と受容者の情動との関係について、それぞれ考察した。ここでは、作品受容に際する受容者の知識量は、その感動量とは関係なく、受容感覚に依存していることが裏付けられた。すなわち、視覚による受容、人形の動きが受容者の情動の大きな要因となっていることが改めて確認された。また、文楽スコアから人間の感動と深い関係があると考えられた部分に関して、実験によって、その抽出が妥当なものであることが明らかになった。これは、文楽スコアを分析資料として使用することの有効性を裏付けるものとなるであろう。

しかし、この心理学的実験は、基本的に受容者の音や動きへの表層的な反応に関するものであり、鑑賞に時間がかかる作品内容との関連は、反応として反映されにくい部分であるため、結果として表示されたものに限界があることには注意しなければならない。しかしながら、筆者は、人間の営みの中に芸術も作品も存在するという考えから、この研究に着手したため、このような実験が語るものは、大いに意味を持っていると考えている。

第5章では、今後、作品受容に際して作品内容の受容にまで考察を深めていくための試論として、受容者と作品の時系列的な関係について考察を行った。

第1節・第2節では、語水準での受容について、作品の女主人公であるお初が遊女であることから、遊女を意味する「川竹」の語を取り上げて、その語がどのように意味を生成してきたのかを中心に分析・考察を行った。それは、作品に散見される「川」の語が、筆者には、「川竹」を連想させ、その語の語感が、作品のイメージに何らかの影響を与えていると思われたため、行った考察である。

第3節では、「遊女の表象」を取り上げ、個人がどのように語の表象を取り入れ、語のイメージを形成していくのか、その過程を探った。

第6章で、本研究の纏めを行った。当初描いていたようなモデル化は難しいことが判明したが、両者の関係をケース・スタディすることで、その関係の一端が見えた。

以上の作業・考察から、学位論文において明らかになったことは、人間存在と作品の関係の表層部分と、深層部分の一部であった。深層部分が一部しか明らかとならなかったのは、作品内容の受容にかかわる複雑な部分を分析対象としたため、受容者の生活環境や教育環境から得られた、経験や知識の総体にまでは接近できなかったからである。しかし、こういった部分の検証を重ねていくことで、作品受容の総体に関わる普遍的な研究へと接近できるという筆者の考えは提示できた。

今後の課題としては、作品受容の直截な関連に関して、4章で行ったような実験をさらに深めて、考察を重ねていきたいと考えている。また、作品内容に関わる深い関連に関しては、教育環境や生活環境から生成する、作品受容に際し特に注目される言葉や音・動きそれぞれについて、調査、分析、考察を重ねていきたいと考えている。

Abstract

For the purpose of studying how human existence and cultural phenomena relate each other, this thesis describes, analyzes and examines the relationship between the Bunraku, *The Love Suicides at Sonezaki* and those who accept it.

In Chapter 1, Section 1 examines why the Bunraku can provide a case study of this thesis. Sections 2 and 3 deal with the “Bunraku Score” (the Score), the analysis tool used for this thesis, discussing not only its significance but also its problems and their

solution procedure. Section 4 shows the Score made for this thesis.

Chapter 2 analyzes, by using the Score, how the performance is accepted. Sections 1 and 2 show how the analysis is done. Section 3 reads and analyzes the Score. The analysis is summarized in Section 4.

In Chapter 3, based on the Score, a physical analysis on accepters' emotions is made, illustrating the basic frequency and the power of the emotions by using Fourier analysis.

Chapter 4 examines the relationship between human emotions and the Bunraku, by using a psychological experiment. Section 1 shows what led to the experiment. Section 2 takes a brief look at a psychological view on visual acceptance. Section 3 explains the psychological experiment that this experiment refers to. Section 4 shows the purpose and method of the experiment, its participants, the stimuli, the equipment and other procedures. Section 5 compares the experiment results with the accepters' knowledge of the Bunraku, the types of stimuli and the accepters' emotions while perceiving the stimuli.

Chapter 5 describes the chronological relationship between an accepter and the Bunraku. Section 1 and 2 deal with linguistic units, analyzing and examining the word *Kawatake*. Section 3 features the representation of a *Yujo*, a prostitute, examining how an accepter reacts to the representation and forms its image.

Chapter 6 concludes this study. Although it proved to be difficult to model the relationship between the Bunraku and its acceptance as originally planned, this case study shows an aspect of the relationship.

The Bunraku Score is attached as a reference.

論文審査の結果の要旨

本論文は、人間存在と文化現象の関係の一端を、もっぱら特定の芸術作品が特定の個人に与える情動的影響、すなわちいわゆる「感動」の諸相を分析することによって、解明しようと試みたものである。

論者の言葉を借りれば、「芸術の受容者相対的な部分に着目して個別・個人的な水準で、両者の関係を考察することから、人間にとって作品がどのような働きを持ち、人生にどのような影響をもたらすのかについて、明らかにする」ということを目標に、本論文は具体的には、個別作品として文楽『曾根崎心中』、個別受容者として論者自身を取り上げている。したがって、本論文の課題と困難も最初から明白であり、論者自身もそれを明確に意識していたとすることができる。それは、すなわち、芸術作品が個別の受容者にどのような情動的な影響を与えるかという極めて主観的な「出来事」の内実をいかに客観的に分析し、そこからいかに普遍的な結論を得ることができるか、ということである。

このもっとも重要な点で、論者は大いに苦しみ、本論文全体を通じて芸術経験の「主観性」と「客観性」、「個別性」と「普遍性」の相反する契機に翻弄され続けてきた、と見ることもできる。しかしながら、たとえ哲学的分析によろうと心理学的分析によろうと、あるいは文学的手法に頼ろうと生理学的手法に頼ろうと、いまだ確実な方法論すら存在せず、よるべき先達の手本すら存在しないこのテーマ領域で、論者が果敢に新たな分析方法の開拓に挑戦し、それを多くの困難を乗り越え実現させるに至ったことは、審査員一同、高く評価しているところである。すなわちそれは、文楽『曾根崎心中』の全体像を総覧的な仕方では捉えるための「文楽スコア」の作成である。このスコアは、文楽が〈言葉・音楽・人形動作〉の三位一体となった時間芸術として存在している様相を、最大限、客観的に捉えようとするためのものであり、この種の分析は、これまで音楽部分の五線譜化さえ、上演者を含めた様々な関係者の理解がなかなか得られずに実現が不可能なものであった。さらに論者は、この文楽スコアのもっとも困難な部分、すなわち人形の動きを記載する舞踊譜部分を作成するために英国のベネッシュ譜を取り入れ、このベネッシュ譜を扱える海外の協力者を探しだし、ようやく〈言葉・音楽・人形動作〉の3層構造を表現できる総合的なスコアを作成するに至ったのである。

本論文全体の構成は6章からなる。「序」において本論文の目的が述べられた後、第1章では、文楽『曾根崎心中』及び論者自身の体験が本論文の分析対象として取り上げられるべき妥当性が述べられる。すなわち、『曾根崎心中』が鑑賞の対象として自らに内包する「解釈の多様性」、その解釈の一つを身をもって体験し続けている論者の視点、がそれである。続く第2章では、個別受容者としての論者の「感動」を惹起する部分とそうでない部分とが対比されながら、両者についての「文楽スコア」が作成され、その解読が提示される。ここにおいて論者は、『曾根崎心中』の総合芸術・文楽としてのいわば「立体的な分析」を初めて可能にし、例えば、作品中のある一つの情動の流れがいかに効果的な仕方では構成されているかを解明している。以下、具体的な分析例を一箇所だけ本論文から引用する。

-----この間は、「心が通うなら」という言葉のメッセージが、浄瑠璃として語られることでより強く受容者の心へ伝達される。「こころが」部分で浄瑠璃の音高と三味線の音高が段階的に接近し、「かよ」で同音(G sharp)になることで、音によって象徴的に初めの願望が少し具現化し高まっていく様子が受容者へ伝達される。そののち、受容者の情動的な興奮は、浄瑠璃がポルタメントを伴うことで頂点へ達し初めの強い願望を受容者自身も実感し得る。

(p.94) -----

この種の分析を連続的に積み重ねることによって、文楽『曾根崎心中』がいかにして論者に、ひいてはわれわれに強い情動を引き起こすのかという秘密が暴かれていくのだが、惜しむらくは、その分析と解明が最後まではやり遂げられずに、いまだ文楽スコアの「解説」に留まってしまった感が否めないことである。この分析と解明をやり遂げ、それを普遍的なレベルの「説明」へと昇華させることは、論者に課せられた次の課題であろう。

続く、第3章では、文楽スコアで取り上げられた作品部分に関して、とくに音楽的要素の物理的分析とでもいうべきことが試みられる。ここでは、文楽スコアで抽出した幾つかの重要な音楽的要素、跳躍進行、ポルタメント、三味線の連打などについてのフーリエ解析による画像化の試みが行われている。また、4章では、文楽スコアの「感動」を引き起こす部分とそうでない部分について、一種の心理学的実験が行われている。ここでは、『曾根崎心中』をよく知っている者とそうでない者を被験者として、情動を動かされた度合いを「連続量としての感動量」として測定し、そのデータの比較がなされている。その結果、論者は、あくまで表層的分析に留まると断った上で、「作品の受容に際する受容者の知識量は、その感動量とは関係なく、受容感覚に依存している」と結論づけている。第5章では視点を換え、作品ではなく、受容者である論者自身の生活環境の歴史という個別性から、文楽『曾根崎心中』の持つ、さしあたりは論者にとっての意味への接近が試みられている。すわわち、「遊女」というイメージにおける語「かわたけ」の論者における来歴、文学における「遊女」そのもののイメージの論者における来歴が記述・分析される。そして、最終章、6章においては、本論文における研究の総括がなされ、芸術作品と個別受容者の関係の分析において文楽スコアのような客観的な分析手法が有効であることの確認と同時に、なおこの種の分析が表層的なレベルに留まっているという評価が示され、最後に、今後は文楽の3つの構成要素それぞれについてより深い分析を試み、それを受容者である論者自身の記憶を掘り起こす作業に求めたい、という見通しが述べられる。

審査委員会においては、口頭発表会及び論文検討会において取り上げられた文楽スコア作成の意義と分析の限界についての議論を踏まえ、本論文がなお、芸術作品とそれの与える深い情動との関係について「主観的視座」と「客観的視座」を十分説得的には捌ききれていないこと（したがって、概念的な整理がまだ十分ではないこと）、また、3章、4章における記述・分析が本論文の基本姿勢である〈個別受容者の経験〉から離れ、客観的なデータ提示の「誘惑」にやや屈した面があること、総じて作品とその受容の関係に関する分析と「普遍的レベルの説明」において力不足であることなどが指摘されたが、論者による文楽スコア作成のアイデアと作成実現までの研究手法上の手腕はそれらの難点を補って余りあると評価され、審査員一同は、論者の今後の研究上に期待される可能性も含め、本論文が博士論文として十分水準に達していると判定した。